

「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

【学習成果】

現地の教員による授業や、ゲストスピーカーによるセミナーなどに参加した。この中では学生達は積極的に、発言・質問をしており、非常に刺激を受けた。一方、その内容等については京大の学生とはそれほど差はなく、むしろ我が大学の授業のほうがレベルが高いと感じられることが多かった。したがって、堅実な英語力をつけることができればきちんと世界の学生と対等に渡り合っていくことができると思われた。授業以外では、現地の教員を含めたメンバーでワークショップを行ったが、こちらでは「分析アジア哲学」について英語での議論を行い、様々な知見を得ることができた。

【海外での経験】

シンガポールは今まさに大きな経済発展を遂げている国であり、国全体から活力が感じられた。また、非常に福利厚生が厚く、多種多様の援助がなされているようである。一方で、たばこや酒などの嗜好品に対しては非常に高い税金がかけられており、このためかはわからないが派遣先大学の学生達は飲酒の習慣がほとんどないようである。地下鉄やバスなどは共通のプリペイドカードを用いることができ、コストが低いことも相まって非常に利便性が高かった。大学から少し離れたところにはチャイナタウンやリトルインディアなどがあり、文化的にも非常に多様である。基本的には中国系の住民が多いように感じられたが、人通りの多いところなどでは様々な人種の人々がいろいろな言語で会話をしており、とても国際色が豊かであった。

【プログラム内容】

平日は基本的に現地の講義に出席をした。2月15-18日の4日間は、西谷啓治及び K.C.Bhattacharyya という2人のアジア圏の哲学者についてのワークショップを行った。このワークショップでは、アジアの哲学を専門にしていない現地の教員なども交え、広い視点から有意義な議論が行えた。さらに、京都大学とシンガポール国立大学の今後の交流についても話し合いがもたれた。

【進路への影響】

現地の学生の英語力の高さに非常に刺激をうけると同時に、彼等や現地の教員とより内容のある議論ができるような英語力をつけたいと強く思われた。また、アジア圏においても哲学研究の盛り上がりを感じた。今後はヨーロッパ圏だけではなく、アジア圏の大学も視野に入れて留学や交流などを考えていくべきだと思われる。

京都大学文学研究科修士1年 (氏名) 五十嵐涼介